

【優秀賞】

みっちゃん

石井 萌花（兵庫県 関西学院中学部 3年生）

長い坂道を上り切ったその先に、三日月がシンボルの母校がある。息をきらしながら辿り着く門をくぐると、きまって私に爽やかな風が吹き付ける。緑が溢れるこの大学の、道を挟んだ隣の敷地に中学部棟があり、私とみっちゃんはそこで出会った。

長い睫毛をバサバサと音を立てながら隣りする、澄んだ目の持ち主であるみっちゃんは、いつも恥ずかしそうにしていた。人付き合いが苦手なせいで、口下手で、一見不愛想だ。その割にはたまにお調子者になるみっちゃんを本当に理解している者は恐らく少ない。でも私は知っている。みっちゃんは人一倍ピュアで、繊細で、誰よりも優しい。そしてそれは、文字通り、真のみっちゃんを知る私だけのものである。

毎日誰よりも早く登校し、汗びっしょりになって朝練から戻って来る男の子を、最初は気にも留めていなかったが、クラス委員決めなどになると急に積極的になるそのギャップに気付いた頃、私は自覚もないまま彼を観察し始めていた。一生懸命に目標を達成しようとしながら、壁にぶつかってはもがいている不器用な男の子。いじられキャラでよくからかわれている傷つきやすい男の子。色白の肌をすぐに赤らめる可愛い男の子。何故か気になって

目が離せない。私の母性本能ランプは点滅し始めていた…。

何事に対しても頑張る人は美しい。結果がすぐに出なくても決してくさらず、黙々と努力を続ける姿に心打たれない人はいない。謙虚な姿にも心惹かれる。己を知り、向上心を持って過ごす人は、必ず大きな成長をすることだろう。みっちゃんとは正にそういう人だ。いつの間にか私に対してだけは心を許し、ほんのたまにサディスティックになるのだが、無言の圧力に負けてすぐに何度も謝る所は何とも可愛らしい。自分の方が危なっかしいくせに、私を赤ちゃん扱いし、おろおろしながら見守ってくれるみっちゃんに、私の心はすっかり溶けていった。

みっちゃんとの時間は、日向ぼっこのように穏やかだ。たとえば、キャンパスにある新月池の水面に出来るさざ波程の諍いはあっても、それ以上には決してならない。それはみっちゃんが私を優しくするからだ。優しさは伝染する。幸せも伝染する。みっちゃんもまた伝染する。どちらかと言うと神経質で、人の真意をいつも測ってしまっただけで疲れてしまう私のような人間は扱いにくいと思う。些細なことで感情が揺れるからだ。でもみっちゃんは私の専門家なので、そういった少しの変化も見逃さない。絶妙な距離感を慎重に保ちながら、私の気持ちをはぐすが実上手い。そうやって辛い時は必ず傍にいて涙を拭いてくれた。嬉しい時も一緒に大喜びしてくれた。どんな時も手を繋いで安心させてくれた。決して押しつけがましくなく、何も考えていないような涼しい顔をして、私の心の鎧を外してくれるのだ。みっちゃんとの出会いは奇跡だ。私に足りない物を沢山持っていて、人生に温かさや刺激をプラスしてくれる。この先歩む不安な人生も、子鹿のような匂いがするみっちゃんに寄り添っていれば、上手くいくような気がする。そんな勇氣と希望と安定を与えてくれる人だ。

みっちゃんへ

初めて出会った日を覚えていますか？初めて手を繋いだ時の話題を覚えていますか？いつも見守っていてくれてありがとう。幸せな時間を共に過ごしてくれて心からありがとう。